

PHILANTHUS CORONATUS

FABRICIUS の習性

常 木 勝 次

京城公立中學校

[On the habit of *Philanthus coronatus* Fabricius
(Hymenoptera, Philanthidae).
By Katsuji Tsuneki]

Philanthus 屬の習性は歐洲に於ては多くの觀察者により詳細に調査せられてゐるが、本邦産のものに就ては記録せられたものがないから、茲に朝鮮に於ける觀察を記して置かうと思ふ。

本屬の中 *P. triangulum* Fabricius は飼育蜜蜂 *Apis mellifica* を襲うて之を幼蟲の食餌に供する他、自らその嚙囊中に蓄へられたる蜜を壓迫搾出して舐食する習性がある爲、蜜蜂の害蟲として著名であり従つて最も多くの研究家により觀察せられてゐる。又 *P. venustus* Rossi 及び本報文の *P. coronatus* Fabricius は何れも Andrenidae の *Halictus* を狩る事が知られてゐる。尙 Ferton によれば前者は稀に *Andrena* をも捕へると云ふ。

P. coronatus は朝鮮に於ては餘り多くないやうであるが、筆者の採集記録によれば北支北京及び内蒙古阿巴嘎附近に於ては、さして珍しくない種類である。本文に入る前に種々御教示を受けた九州帝大農學部昆蟲學教室安松京三助教授に深謝の意を表す。

營 巢 地

京城飛行場南側の丘陵地に變成岩の風化して生じた淺い礫質の土地があり、此處に栗の木が植林してあつた。その木は未だ若かつたので枝葉は地を被ふまでに伸びず、樹間には相當露出地が出来てゐて、其處に *Cerceris*

navitatis Smith, *Crabro alatus* Panzer, *Stizus pulcherrimus* Smith 等の狩獵蜂が多數營巢して居り、その中に偶々本種の 1 巢が発見された。

巢の外観

本種の巢の外観は *Stizus pulcherrimus* Smith と全く同様である。私自身此の巢の調査に着手した時は *Stizus* の巢と思つて掘始めた程であつた。即ち、入口は蜂の他出中閉鎖せられ且その左右に各一個宛過剩孔が開いてゐる。過剩孔は眞の巢口より夫々 5 及び 8 cm. 離れて居り、深さ 4 及び 5 cm. で行止つてゐた。尙閉鎖せられてゐる眞の巢口の後方には蜂の搔出した土が稍々長く堆積してゐる。

坑道

坑道の形状は圖に示した如くである。

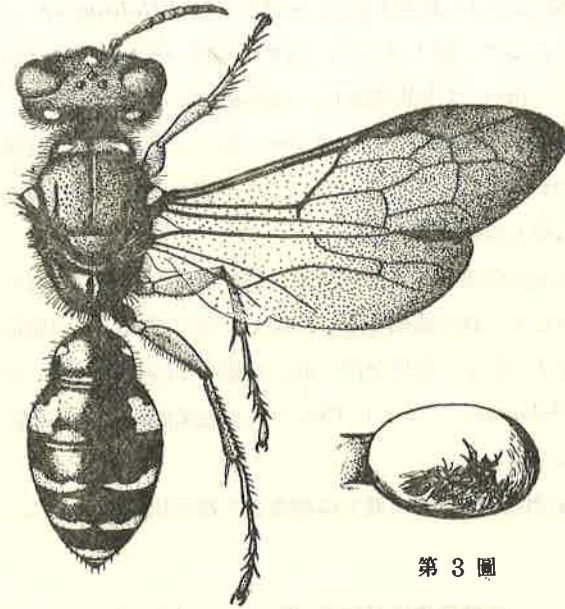
1. 坑道は直径 7~8 mm., 全長 37 cm. に達してゐた。
2. 途中入口より 16 cm. の點に於て緩く土で閉鎖せられてゐる。
3. 全體的に見て坑道は所謂 *Zweigbauten* に屬するが、育房完成後はそこに到る支坑は全く閉鎖せられる。
4. *Stizus pulcherrimus* に比べてその傾斜は稍々急である。終端の深さ 16 cm.

育房

圖の A 附近に第 1 育房、B 附近に第 2 育房があつたが何れも一度に掘出して終つた爲に詳細不明である。C に第 3 育房があり、測定の結果長さ 3.0, 幅 2.0, 高さ 2.0 cm. で、此蜂の體軀に比して甚だ大である。内面は平坦であるが *Cerceris* の如く磨かれてはゐない。

Prey の運搬

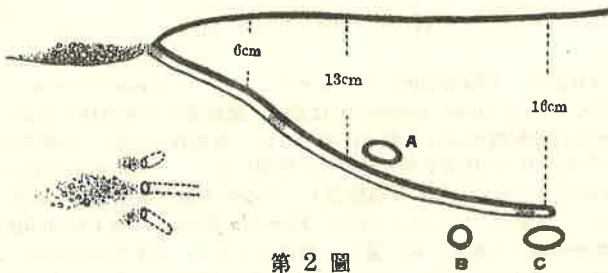
巢の調査中蜂が歸來したので之を網に入れたが、蜂は尙 prey を放さずに歩いてゐたので充分觀察出來た。即ち prey の觸角を口器で啣へ、腹合せにして引摺つてゐる。歩行中は中脚は使つてゐないが飛ぶ時にはこれで prey を保持するらしく思はれた。



第 1 圖



第 3 圖



第 2 圖

Philanthus coronatus Fabricius.

第 1 圖：全形。第 2 圖：巢の断面，A，B，C は育房，E は坑道入口，左は過剰坑（上面圖）。第 3 圖：育房（自然大）に入れられたる *Halictus* sp.

Prey 及び卵

Prey は歐洲に於ける觀察と同様全部同一種の *Halictus* sp. で調査した悉くが♀であつた。第1巢6頭、第2巢6頭、第3巢8頭を含んでゐた。第3巢に於て、prey は全部仰臥し、頭部を内方に向けて居た。卵は光澤ある乳白色で長さ 5.5 mm., 幅 1.0 mm. あり、最上部の(最後に取り入れられたる) prey に産付してあつたが、土が崩れた爲一時埋没し、産付位置を明らかに爲し得なかつた。

尙第3巢は既に完成して居り、坑道の終端はまだ育房に作られて居らなかつたにも拘らず、蜂が獲物をもつて歸つて來た事は、この屬に於ても、*Cerceris* に於ける如く、育房を作る前に狩獵する特異な習性がある事が推察出来る。*Philanthus* は分類上 *Cerceris* と近縁な關係がある故、此のことは蓋し當然であらう。

本種の狩獵習性、營繭等に就ては調査する事が出来なかつた。

佐世保市に於ける *Tramea virginia*

(Rambur) ハネビロトンボ

石 原 保

Tramea virginia (Rambur) ハネビロトンボ、一名オホウスバキトンボ [*T. chinensis* (De Geer), nom. praecoc.] は臺灣、琉球等では普通種とは云へ、九州とか四國産の標本は比較的珍品と見做されて居るが、佐世保市に於ては相當多いやうである。昭和17年9月20日正午少し過ぎに、公園になつて居る市内の小高い丘に登つてみた時、1時間許り居つた間に5頭發見し、その中3頭を採集した。當日は10~13 m. 位の強風で、平常多く飛び交つて居る *Pantala flavescens* (Fabricius) ウスバキトンボは風勢の衰へた樹蔭に極く僅かに飛翔して居るに過ぎなかつたが、ハネビロトンボは、風速の殆ど全く弱まつて居らぬ、梢に近い空間の一點に風上に向つて静止して居る事が多く、明瞭な趨風性 (Anemotaxis) を認める事が出来た。上記の強風中に定位する飛翔力は全く驚嘆に値する程で、頻々本州も東京邊でも採集せられた事實も宜なる哉と思はれた。J. G. Needham 等は、米國産の模式標本の "Amer. sept." とあるラベルを恐らく間違として大に疑問視して居るが、[Needham, J. G. and Heywood, H. B (1929), A handbook of the dragonflies of N. America, p. 524] 模式標本は、迷行した個體とも一應考へ得るのではなからうか。丁度2週間後に機會を得て前記の場所を訪れた時も、未だに1頭ながら本種を目撃する事が出来た。末筆ながら原記載の閲覽と有益なる御注意に與つた江崎梯三教授に厚く謝意を表する。